校長室だより

ゆうかり通信

第5号　令和5年11月22日(水)

【講演会では】

１１月１５日（水）に長崎市教育会講演会があり、数名の先生方と参加しました。名城大学・曽山和彦先生の「通常の学級にいる特別に配慮を要する児童生徒の対応について」と題した講演は、本校の現状を踏まえるとタイムリーでした。９０分間の話は内容が盛沢山でしたが、次の５つについては共有したいと思います。

1　今、学校に求められているのは、子供に「人とかかわる力」を身に着けさせること

今の子供は、小さい時から人とかかわる経験が極端に不足しており、このことが、「学級不適応（不登校、いじめ）」、「通常学級における気になる子」の問題に直結している。学校は、子供たちに、様々なかかわりの機会を用意しなければならない。

2　周りの子を育てたら、気になる子も一緒に育つ

気になる子を支える周りの友達の力は、教師一人の支援をはるかに超える。「ハンカチのほつれた糸を持ち上げても、糸が切れ、ハンカチは持ち上がらない。ハンカチ全体を持ち上げれば糸も上がる。（ハンカチ理論）」これは、教室でできる特別支援教育の王道。

3　ルールづくりは、「2本のアンテナ理論」（子供に伝わるのはアイメッセージ）

＜「話を聴く」というルール、スキルの育成の例＞

①　ルール違反を見逃さないアンテナによる感知＆対応

「うるさい、静かにしなさい（ユー）」→「話がしにくくて、困るのだけど（アイ）」

「あれっ、ルールは？（？の問いかけ）」

②　ルール遵守を見逃さないアンテナによる感知＆対応

「えらいね（ユー）」　→「ありがとう。嬉しい。助かる。（アイ）」

「顔を見ながら「ＯＫ」サイン（認めるサイン提示）」

4　ASD（自閉症スペクトラム障害）に対する「理にかなう」支援

①　視覚情報の活用（フォトグラフィックメモリー、カメラで写すように認識する）

②　一度に一つ（短期記憶の弱さがある）

③　予定の伝達（見通しの持ちにくさがある）

④　肯定的表現（禁止や注意が苦手。「廊下は走らない」→「廊下は静かに歩こう」）

⑤　文化に寄り添う（感覚の過敏性、字義通りの解釈）　※①～④は、ユニバーサルな支援

5　かかわりの力を育むには、スリンプルプログラムの実践を

このプログラムは、週１回１０分間、かかわり活動（関係づくり）の演習を行うもの。演習は、子供、教師が負担感を感じず楽しめる内容となっており、演習の一番人気は「アドジャン」。このプログラムを継続して実践することによって、子供たちが仲良くなったり、先生の指示を聞くようになったりするほか、不登校や問題行動が激減するなど、学校が変わったという報告が随分ある。ネットで「スリンプルプログラム」「アドジャン」を検索すると、多くの実践事例が出てくる。